
宴 伊江村八十千和診療日誌抜粋

じょうが あかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宴 伊江村八十千和診療日誌抜粋

【Nコード】

N1886B

【作者名】

じょうが あかり

【あらすじ】

BLEACH、四番隊三席、伊江村八十千和の可哀相な日誌です。

(前書き)

() の中には、本来の日誌では伊江村三席が二本線で訂正を入れていた箇所です。

今日こそはと、私、四番隊第三席伊江村八十千和は立ち上がった。
こここのところ毎日十一番隊の連中 皆さんが詰所で大騒ぎをされている。

騒ぎの中心は、（あのハゲとアフロ）斑目一角三席と綾瀬川弓親五席である。

詰所の障子を開けると、

そこにいた酒瓶片手に裸踊りを披露している連中もそれを囃し立てている声もそいつ等を肴に飲んで（いる奴等も）おられた十一番隊の皆さんが

ぴたりと

動きを止めこちらを（ガン見）みつめられた。

変な緊張感が漂ったが、一瞬で融解し、私が、

「失礼します」

と挨拶する頃には、再びその馬鹿騒ぎを繰り広げ余興を楽しんでおられるようでした。

騒ぎの間をぬって、中心人物の斑目三席の元へ膝を寄せた。

「斑目三席」

と声をかけると、横から茶わんを差し出され、無理矢理受け取られるとそこに酒を注がれた。

御猪口ではない、茶わんにだ。

「わ、私は酒を頂きに参ったのではありません」

きぜんとした態度でこう申したところ、

「おいおい、まずは挨拶だろ」

こうさらにすすめられた。

「あ、挨拶」

「そうだよ、まずは、一杯・・・ちっ、こらあ、誰だあ、注いだのはっ！ ケチんじゃねえよ！！」

どこかへそう吠えると斑目三席は、

「すまねえなあ、これじゃ呑む気にならねえよなあ」

そう、後ろ頭を掻きながら自分が口飲みしていた銚子からさらに茶わんへと酒を溢れる程注がれた。

（隊服に酒がこぼれて良い迷惑）気を使って頂いたようです。

これが、十一番隊流ということでしょうが、受ける訳にはいかな
いので、丁重にお断りした。

「いや、しかし、勤務中故頂く訳には・・・」

「ああ？ 俺の酒が飲めねえってか！！」

「なんだとお！！ 斑目三席の酒が飲めねえだとお！！」

一瞬、私の周りが暗くなったかと思うと十一番隊の残党 皆さん
が私を取り囲み凄い形相で（メンチを切って）見下ろしていらっし
やった。

「いつ、い、いや・・・勤務中故・・・」

私はきぜんとした態度でもう一度お断りした。

非常によろしくない空気が漂っていた。

そこへ、

「おまたせしましたー」

と聞き覚えのある声が。

これぞ天の助けと皆さんの間から声の主の方を覗くと、

「熱爛になりまーす」

「荻堂！！」

四番隊第八席荻堂春信の姿があった。

前掛け姿で、四本鉚子の入った籠を両手に持っていた。

「あ、伊江村三席。お疲れさまでーす」

「貴様、ここで一体・・・」

聞くまでもなかったが口をついて出た言葉だった。

荻堂は自分の姿を芝居がかった態度で見下ろして、

「出前持ち？　ですかねえ」

さらっとこう答えた。常々から私はこの男の、

” 甘いマスクとさらさらヘアーの癒し系イケメンと女性死神の間で大評判なのが気に入らなかった。”

「勝手に書き加えるな！！」

「すみません、許可を取るのを忘れていました。後で申請書を提出します」

「そういう問題じゃないっ！　非常識にも程がある」

「始末書も提出しましょうか？」

「・・・なんで、出前持ちなどしているかと聞いている」

「何でって・・・山田七席につき合って？」

そういう荻堂の視線の先を追うと、

（うちの唐変木）四番隊第七席山田花太郎が

おぼんに乗った枝豆をそおっと斑目三席の前に差し出しているところであった。

自らの目を疑い、眼鏡を上げ直した。

「君っ！ 山田七席、君はここで何をしているんだ。卯ノ花隊長から訓告を受けたばかりじゃないか」

「はい、・・・判ってます。でも、・・・ハハハハハ」

乾いた笑いだけで、その先の言葉は告げられなかったが、悲しそうに見上げた目が、「この人達に逆らうなんて出来ません」と訴えていた。

私もこれ以上は問い質す事が出来なかった。

「っていうか、おめえ、俺達のこと忘れてねえ？」

十一番隊の面々がこう（ツツコン）おっしやった。出来れば忘れ

たかった。

「いっいえ、そのようなことは決して・・・」

「ああん？　じゃあ、呑むのか？　呑まねえのか？」

「そ、それは・・・」

ぱあん！！！！

派手な音をたてて、障子が開いた。

するとやはり、十一番隊の皆さんが一瞬動きを止め、

私の時とは違い、

その緊張のまま、斑目三席と綾瀬川五席以外は素早く立ち上がると九十度に身体を曲げ、大声を張り上げた。

「おつかれさまっす、隊長！！」

「おう、やってんなあ」

（悪の親玉）十一番隊隊長更木剣八その人であった。

「あ、隊長。もう起きて大丈夫なんすか？」

「隊長、お身体の方は？」

斑目三席と綾瀬川五席が更木隊長に席を開けた。

「おう、かすり傷だ、大したこたあねえ。それより、俺にも飲ませろ」

とどっかりと腰をおろし、萩堂の持っていた熱燗を手にとった。

（もうダメだと思った。）お元気そうでなによりだと思いました。

「で？」

斑目三席が私を振り返った。

「あんた、結局なにしに来たんだ？」

「み、皆様方の診療でございます」

今日の抗議活動については、これにて終了した。

(後書き)

また、お目汚し、大変申し訳ございませんでした。

この作品は2006年春に同人誌発表したものの、おまけ作品に加筆修正をしました。

本編は、十一番隊メインのお話です。また、そちらもUPしましたら、並べて読んでいただけると幸いです。

また、もし、気に入ってくださったら、別の作品も読んでいただければ幸いです。

じょうがあかり拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1886b/>

宴 伊江村八十千和診療日誌抜粋

2010年10月19日10時13分発行